

# ゼンハイザー HD800

オープン価格(16万円前後)

岩井 喬 Takashi Iwai



- 形式：オープン型
- ドライバー：56mmダイナミック型
- 再生周波数：6Hz～51kHz
- 感度：102dB
- インピーダンス：300Ω
- ケーブル長：3m
- プラグ：標準
- 重量：330g

## 驚異的な表現力の深さを持つ、21世紀のリファレンス機

### ヘッドフォンの歴史を変えた 往年の名機HD414

ゼンハイザーは第二次世界大戦が終結した1945年、ドイツ・ハノーファーで産声を上げた。フリッツ・ゼンハイザー博士によって創業された当初の社名は

“Laboratorium Wennebostel”で、1958年に現在の社名へと変更された。1946年には初の自社製マイクDMIを発表。その後、1960年にはゼンハイザーの名を高めたダイナミック型マイクの名機MD421が発売される。その後もプロ向けの音響製

品開発を続け、マイクはもとより、現在でも強みを発揮する無線ワイヤレスシステムや会議室、美術館のガイダンスシステムなど、設備向け音響製品開発でも高い評価を受けている。なかでも一般ユーザーに高く評価されたのは、1968年に発

表された世界初のオープン型ヘッドフォンHD414だ。全世界で1,000万台以上も売り上げたという驚異的なモデルで、それまでのスピーカー然としたユニットを用いた密閉型ヘッドフォンとはまったく違う、小型振動板を用いたドライバーユニットはヘッドフォンの歴史を塗り替える存在であった。以降、数多くのヘッドフォンを手がけているが、オープン型にこだわるのは密閉型では作り出せない、広がりある音場感。そしてそのいきいきとした空間で躍動する、音楽のあるべき姿を考えた時、最高のものが何かという回答として、むしろオープン型以外にありえないという結論に至ったからであるという。

1982年、現会長のヤルグ・ゼンハイザー博士に経営が委譲され、今に至るが、その間コンデンサーマイク製造大手、ノイマンを傘下に収めるなど、音響業界の中でもトップクラスの技術と伝統が息づくブランドとして、現在も成長を続けている。

## リングドライバーの完成には14年もの歳月を要した

1994年、一つのドライバーに対してのアイデアが提起される。それがこのHD800に搭載された“リングドライバー”についてのものであった。しかし、このリングドライバーが現実のものとなるまでは14年もの歳月が必要となるほど、困難を極めた道のりであったようだ。ドライバー口径は大きいほど、振動板の振幅を小さくできるので有効手段ではあるが、高域において固有モードであるスプリアス振動が発生し、制御しきれない微細な振動が音を濁す要因となってしまう。その点リングドライバーは98回転で成型したφ40mmの35層構造アルミボイスコイルと、内・外周、二つのサポート面を設けることで、φ56mmという最大級の大型Duofol振動板も極限まで均一に制御することができるのだ。マグネットもφ50mmのリング形状で、ボイスコイルが収められるギャップは僅か0.6mmという精密な加工が施されている。こうした取り組みの結果、周波数特性も飛躍的に向上し、6Hz～51kHzまでを単一ユニットで再生可能となった。

これまでのハイエンド機HD650が2003年に発売される前年、2002年よりHD800のプロジェクトがスタート。最終サンプ



リング形状とすることで大口径化と振動板の正確なコントロールという相反する要素を両立させたHD800のφ56mmドライバー。40mmボイスコイル、50mmマグネットとともにヘッドフォン用としては世界最大。

ルが完成する2008年まで、リングドライバー以外のポイントにも細部に渡って検討が重ねられた。まず大きく従来シリーズと異なるのは、その先鋭的なデザインだろう。より未来を見据えたエンジン＝“リングドライバー”を収める筐体も相応のものではなくてはならない。ユニットも自然な音場空間を形成させるため、耳に対して角度をつけて設置されるほか、ステンレスメッシュを大胆に使ったハウジング部のフレームに、宇宙開発でも用いられる“レオナ”という高硬度で軽量なプラスチックを採用。ヘッドバンドもダンピングエレメントが付いた、ステンレスを中心としたハイブリッド構造とするなど、完全に一から作り上げたフラッグシップ機となっている。

銀コートOFC導体を用いた布巻きケーブルには、専用コネクタが装備され、着脱可能だ。イヤerpッドは完全に耳を覆うスタイルで、肌触りの良い布地のアルキヤンタラ素材を採用。側圧はHD25クラスの強めなスペックだが、接触面積が大きいいためか、つらさは感じない。むしろ300gを超える重量とは思えないほど、軽く感じてしまう快適な装着感である。

そのサウンドはこれまでのHD650とは大きく違う、鮮烈なもので、オープン型ならではの開放的な空間の広がりのほか、奥行き、爽快な音スケの良さを体感できる。驚くのは密閉型のような音像のタイトなアタック、リリースの正確さである。スタジオのコントロールルーム内におけるモニターヘッドフォンとしても十分活用できる解像度の高さだ。緻密で余韻の厳密なニュアンスまで余すことなく伝えてくれるが、決してエッジの尖ったサウンドではなく、ソースに収められた音源



ドライバーユニットは、耳に対して真横ではなく、角度をもって取り付けられている。ちょうど下図のように、斜め前方に置いたスピーカーから音が耳に届くことになり、自然な音場感が再現できる。



ケーブルは着脱式となっている。ヘッドフォンをつけたまま立ち上がったとき、ケーブルが何かに引っかかって外れることで負荷を逃して断線を防ぐ仕組み。また、HD650同様、高音質をうたった交換ケーブルが発売されるかもしれない。



ヘッドバンド上部にはフラッグシップモデルにふさわしく、一台ごとにシリアルナンバーが刻印される。ヘッドバンドは金属とプラスチックによるサンドイッチ構造となっていて、優れた減衰特性により音に有害な振動を本体部に伝えない。

を付帯音なく、そのまま引き出してくれる。なかでもクラシックにおける音場の広さ、管弦楽器の目の覚めるような鮮やかな描写と、細やかにほぐれる粒立ちの良さ、そしてホールトーンの豊潤でふくよかな響きは特筆すべきもの。ティンパニの連打もキレ良く、皮の振幅も克明に見えてきた。ヴォーカルも口元の厚みが程良く、生々しいエッジによって、くっきり

と中央に定位。ピアノはアタックの強弱、艶やかな余韻の瑞々しい響きを、澄んだ空間にすっきりと浮かび上がらせている。

個人的に驚いたのはTOTOのドラマー、サイモン・フィリップスの大口径キックドラムのアタック音だ。膨大な空気が瞬間的に押し出される描写はこれまで味わったことがない。驚異的な表現力の深さを持つ、21世紀に相応しいリファレンス機だ。



## CROSS REVIEW HD800ここがすごい!

### ◆コーラスが一人一人分離して聴こえたのには驚いた

大塚康一

大型だが決して重たくないし、ハウジングとヘッドバンドを含むすべてが精度感溢れる仕上げで、フィット感も良好。同様に音も軽快で、ストレスなく出てくる感じがある。特に低音がリアルで、エレキベースなどは、あたかもそこで実際に弾いている感じまで伝わってくる。しかも、無駄に膨らんだ低音は出てこない。どんなに厳しいソースでも受け止めてしまう懐の深さがあり、歪みは微塵も感じないのは、さすがだ。また、歌入りのソースでは、数人居るバ

ックコーラスが一人一人分離して聴こえたのには驚いた。恐るべき解像力である。ただし、構造はユニット剥き出しのようなものなので音漏れが大きく、能率は低め。DAPでは少々きついが、そもそも標準ジャック(ものすごくしっかりした作りで長い)しか付いていないので、ミニジャックに挿すには変換プラグが必要だし、価格的にも釣り合わないだろう。ピュアオーディオ用として、ベストに近いヘッドフォンと言える。

### ◆録音現場の雰囲気まで感じとれる空間表現の豊かさ

佐藤良平

航空機としての性能を真摯に追求した結果ジェットエンジンを発明するに到ったのがT1だとするならば、従来のヘッドフォンの概念を超える製品を目指して開発を進めたあげく宇宙ロケットを作り上げてしまったのが本機だと言えるかも知れない。音の情報量や表現力の余裕も他機で得がたいレベルに達しているが、本機最大の特徴は空間表現の豊かさにある。個々の楽器とリスナーの間にある距離感、音場を伝播する音の動き、録音の行なわれた場所が持つ雰

囲気といった要素を、今までにない精度で再現する。元來この種の仕事はヘッドフォン自体でなくヘッドフォンアンプが受け持つべき役割だと考えていたが、本機は直差してここまでやれるという点で驚異的だ。必ずしもHD650の音色がゼンハイザーの理想像なのではなく、あくまでもレパートリーの一つに過ぎないことを立証した点も興味深い。本体はパッと見だと巨大に感じるが意外に軽く、かけ心地は思いのほか快適だ。

### ◆一つひとつの音が埋もれず、際立って聴こえる

中林直樹

耳に対して、ひと回りもふた回りも大きいハウジング、剛性の高いプラスチックで構成されたフレーム、メタル素材を用いたヘッドバンドなど、そのルックスだけでもハイエンドモデルとしての風格は十分すぎるほどだ。そんなあまりにメカニカルな佇まいは、知らぬ人には測定装置や聴覚実験用の機器と言っても通じてしまいそうである。しかし、そのサウンドは紛れもなく音楽を楽しむためにデザインされたものだ。最大の特徴は、一つひとつの音が埋もれ

ず、際立つこと。アコースティックギターとエレキギターが重奏するロックでは、それぞれの音をしっかりと描き分けてくれる。ヴォーカルも、フロントかつセンターに位置し、コーラスを含め他のパートと調和する。ピアノの高音は、鳴った瞬間から、自然に消えはじめ空気に溶けていくようだ。極めて快活で、曇りのないサウンドゆえ、オーセンティックな70年代のロックも、50年代のジャズもみずみずしく響いてくる。

# ゼンハイザー HD800 現地取材レポート

●取材・文／岩井 喬



## ドイツ・ハノーファー本社でのみ製造されるHD800

光栄なことに2009年3月、ドイツ本社で開催された、HD800プレスイベントに参加することができた。全世界からジャーナリスト達が集まり、数年ぶりに誕生したハイエンドモデルの姿を目に焼きつけ、そのサウンドを一足先に堪能していた。

ゼンハイザー本社は歴史ある街、ハノーファーの郊外にある。周囲はのどかな牧草地帯で、本社の敷地内にはオレンジ色の瓦が目を惹く、2階建ての工場が広がる。この中には設計開発部門のほか、マイク本体の彫金加工、低価格マイク「evolution」シリーズの自動製造ライン、無響室などが設けられている。

HD800の製造ラインはオレンジ瓦の工場とは別棟、コンデンサーマイクの振動板も製造している、クリーンルーム完備の最新施設の中に置かれている。日産40～50台という

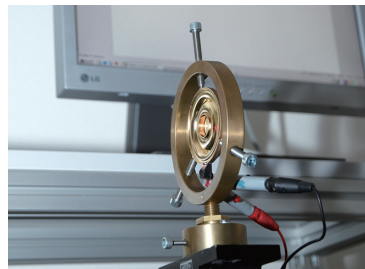


ヤルグ・ゼンハイザー会長。

ペースで、振動板の型抜き段階から、熟練工が各セクションに数人単位で分担し、丁寧に仕上げていく。各工程で細やかなチェックも行なわれており、組み立て後のサウンドオリティチェックでも、専任者を付けて作業に当たっている。すべて手作業で組み上げられるHD800は、ドイツ・ハノーファー本社でのみ製造されるという。

ヤルグ・ゼンハイザー会長、フォルカー・パーテルス社長。そしてHD800開発のカギとなる人物である、シニアアコースティックエンジニア、アクセル・グレル氏にも直接お会いし、HD800にかかる意気込みを伺った。やはりリングドライバー開発に対しては一番苦労したということ、そして音波の振動と音声信号の変換に関するトランスデューサーについて、入口となるマイク、そして出口であるヘッドフォンの双方を手がけることで、お互いのノウハウを持ちより相互補完ができる点に同社のメリットがあること。さらにヤルグ会長は今でもHD650を愛用している、とのことで「早くHD800に切り換えて欲しい」というフォルカー社長の一言が笑いを誘う微笑ましい一幕もあった。

イベント最後の夜には、特設会場で行なったライブを同社マイクで収録し、HD800でそのサウンドの生々しさを体感するセッションも開かれた。レコーディングアプリケーションマネージャー、Gregor Zielinsky氏は「ドイツの録音スタジオでは、確認したい帯域、サウンドごとにHD580とHD25を使い分けることが多かったが、HD800によって一台でモニタリングできるようになった」と、そのサウンドに自信をのぞかせていた。



HD800のドライバーユニットはレーザー解析技術を駆使してミクロン単位の精度で設計される。



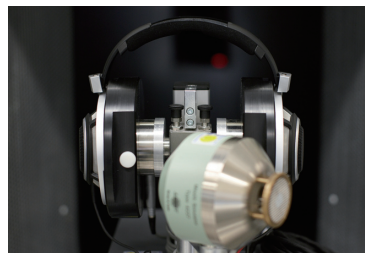
一枚一枚、ていねいにプレスされたドライバーにわずか42ミクロンのワイヤーを3.5層にしたボイスコイルが取り付けられていく。



イヤークップにドライバーユニットが組み込む。最先端設備を整えた工場だが、HD800の製造には熟練した職人の技術が欠かせないという。



イヤークップにフレーム、ヘッドバンドなどが取り付けられ、HD800の形になってきた。



完成したHD800の最終テスト段階。特殊な測定装置の中に入れ、周波数特性や音圧レベルなど、厳しい基準値をクリアしたものが出荷される。